

Georges B. J. Dreyfus 著 *Recognizing Reality*

木村 誠 司

書評に入る前に、本書『実在の認識—ダルマキールティの哲学とそのチベットの解釈』の著者ドレイフェス Georges B. J. Dreyfus 氏の学問的略歴を紹介しておこう。著者は、一九七〇年から、十五年間にわたり、インドのチベット僧院において、仏教を学習した。そこで、ゲシェー (dge bshes) という学僧としての最高位を得て、特に、仏教論理学・認識論に興味を抱いた。その後、アメリカで西洋哲学を学び、ヨーロッパの仏教文献学にも触れた。このような学問的訓練を経て、一九九一年、本書の基礎となった博士論文「仏教の伝統における存在論・言語哲学・認識論」(Ontology, Philosophy of Language and Epistemology in Buddhist Tradition) をヴァージニア大学へ提出した(緒言十一—十二頁)。また、著者は『第二回国際ダルマキールティ学会紀要』(Proceedings of the Second International Dharmakirti Conference) に「ダルマキールティのプラマーナの定義とその解釈者達」(Dharmakirti's Definition of Pramāna and Its Interpreters) と題する論文を発表し、さらに待望久しかったタルマリンチェン Dar ma rin chen (一三六四—一四三二) の『量正理蔵注』 *Rigs gter mnam bshad* を校訂出版した。

このように、輝かしい学問的業績を背影にして、本書が著わされた。さて、本書は、チベットにおけるダルマキールティ Dharmakirti (六〇〇—六六〇) 解釈を論述の主体とするものであるが、ダルマキールティ自身の見解やインドにおける解釈をも考察している。さらに、随所で、西洋哲学との比較も行っている。本書の扱う範囲は、仏教論理学・認識論という分野にとどまらないのである。著者は、次のように自著への抱負を語っている。

アジア思想の学徒としての我々の仕事のひとつは、より広い思想史に暫時統合されるような素材を提供することである。(序論 十一頁)

この抱負が、どの程度達成されたのか、西洋哲学や思想史の素養などまるでない筆者には、判断つきかねる。それ故、筆者には、書評する資格もないことになるのだが、筆者の研究分野と重なる部分について、若干のコメントを加えてみたい。

始めに、本書の全体像を見ておこう。まず、二つの序論が示される。第一の序論では、本書の論述方法等が説明され、主に扱うのは、十四—十五世紀のチベット仏教論理学・認識論であり、特に、ゲル

ク派 (dGe lugs pa) とサキヤ派 (Sa skya pa) に焦点を絞った、と述べられている(二―二頁)。また、従来の研究は、ゲルク派かサキヤ派どちらかに偏向したものである、と批判している(七頁)。第二の序論では、インドとチベットにおける仏教論理学・認識論の歴史がスケッチされている。わけでも、チベットに関する記述は、著者の蘊蓄を示すものである。その重要な部分をいくつか紹介してご紹介。著者は、チベット仏教に多大な影響を与えたアティーシャ Atiśa (九八二―一〇五五) の『菩提道燈論』 (*Bodhipathapradīpa*) には、ダルマキールティの著作を不必要とする記述がある、と報告する(二十一―二十二頁)。筆者は、このことを本書によって始めて知り得た。また、著者は、チベット仏教の金字塔とでも言うべきサキヤパンディタ Sa skya paṇḍita (一一八二―一二五二) の『量正理蔵』 *Tshad ma rigs pa'i gter* についても、貴重な情報を提供した。著者は、『量正理蔵』の本文と自注の内容が異なっていると述べる。そのため、「ある者は自注の真作を疑い、ある者は注釈者による改竄説を唱えた」と報告している(二六頁)。今後は、『量正理蔵』の扱いには、慎重にならざるを得ないであろう。さらに、サキヤ派のシャキヤチョクデン Sakya mchog Idan (一四二八―一五〇七) の思想的変遷についても、著者は明解な意見を披露する。ゲルク派のトゥカン Thū'u bkwan (一七三七―一八〇二) によれば、シャキヤチョクデンは、中観↓唯識↓他空説と変化したと伝えられる。一方、サキヤのカクワンチュータク Ngag dbang chos grags (一五七二―一六四二) によれば、シャキヤチョクデンの見解は終生他空説であったが、³⁾ 著者はシャキヤチョクデンの作品を精査し、トゥカンを支持した(二七八―二九九頁)。

さて、本文の構成については、著者自身の解説を引用しておこう。本書は二巻に分かれる。第一巻は、实在論の観点から普遍の問題を検討する。さらに、仏教論理学・認識論の言語哲学におけるこの問題の重要性を考察する。第一巻は三部に分かれる。第一部は、ダルマキールティの学統の存在論を扱う。そこで、ダルマキールティの非实在論的哲学を考察し、それが作り出す实在と概念の明確な対比を考察する。また、ダルマキールティの非实在論とゲルク派の伝統の穩健な实在論をも対比させる。第一巻第二部は、普遍自体の問題を扱う。实在論と非实在論を対比して、チベットで、如何に多くの教理論争がこの対立に関わっているかを示す。第一巻第三部は、实在論と概念論の意味論的結果を考察する。特に、仏教の言語哲学の特質であるアポーハを検討する。第二巻は、普遍論争に含まれる認識論を考察する。それは、妥当なる知と知覚の概念を巡って、二部に分かれる。第一部は、ダルマキールティとその学統にとって中核をなす妥当なる知を考察する。ダルマキールティによる普遍の否定が、彼をして、知に関する確たる説明を如何に難しくさせたかを示しながら、妥当なる知の矛盾した解釈を考察する。また、この難しさが、後代のインドやチベットの後継者達の間、さらなる論争を生む源となったことを示す。最後に、第二巻第二部は、知覚理論を考察することで、この検討を完成する。表象主義と直接的实在論の対立が、チベットの哲学者達の間、論議を呼んだことを示し、その対立を検討する。また、学派分類⁴⁾ に関わるダルマキールティとその後継者達の見解を考察する。これは、彼の作品の神学的次元を導き出すのである。(二二―三三

頁)

著者は、このように自著を解説する。

さて、本来ならば、第一巻からいいねいに読み進んで書評すべきなのであるが、筆者の現在の興味対象は、第二巻第二部のプラマーナに関する部分なので、まず、そこから読み始めてみた。そこには、様々な文献が引用され、著者の説明が加えられている。しかし、けして理解しやすいものではなかった。予想だにできなかった労力を費やすことになり、他のページに割く時間などなくなってしまった。

それ故、本書全体に対する書評は不可能となり、一時は、筆を取ることをあきらめるつもりであった。だが、筆者の読んだ範囲において、著者の説明は、あまりに錯綜し、文献の引用の仕方も適切とはほど遠いものであった。その有様を伝えることは、必ずしも無駄ではないと判断し、ごく限られた部分に対してでしかないが、あえて、書評を試みることにしたい。

著者は、プラマーナの定義を説く『量評釈』*Pramāṇavārtika*「量成就」*Pramāṇasiddhi*章第一頌を、次のように訳す。

妥当なる知「*||*プラマーナ」とは、欺かない知である。欺かないということとは、(対象に)、機能を達成するための準備が整っている、ということである。(二八九頁)「*||*」内は筆者)

ここで、問題となるのは、(対象に)と著者が補った部分である。著者は、これに関して、「知を記述するに際し、ダルマキールティが、対象にとって欺かないことを述べるのは、奇異に思つかもしれない」と断り、シャーキヤチョコデンの注釈が有益な説明を与えている、と言っ(二八九頁)。そして、*ཅུ་རྒྱུ་ལྟར་*「*||*」が続ける。

Georges B. J. Dreyfus 著 *Recognizing Reality* (木村)

たとえば、火にとって欺かないことは、その燃える性質であり、火の知覚にとって、欺かないことは、燃えるものとして理解することである。(二八九頁)

この例示から、対象に欺かないことがある、という解釈が、どうして導かれるのだろうか。この例示は、知と対象の両者にとって、欺かないことがある、という理解を与えるものであろう。故に、著者の例示は、その訳と矛盾する。では、著者が指摘するシャーキヤチョコデンの注釈は、どうなっているのだろうか。左に、訳してみよう。

また、欺かないこと (*mi shu ba, avisamvada*) は、二つである。すなわち、対象 (*yu*) のと、知 (*yu can*) のとである。第一は、火を求める人間にとって、「燃えている」白壇 (*tsan dan*) の火は火として確定し、樹脂 (*keng shu ka*) の塊は、火として確定していない如きものである。後者は、それ「火」の原因だとしても、それとして確定していない「ので」、それに行動を起こすことはない。火の自相 (*rang mtshan, svalaksana*) に行動を起こすからである。行動を起こす、起こさない対象として、どのようなものが相応しいか、と言うならば、その行動対象 (*jug yul*) と認められていない樹脂の塊は、煮炊きという目的を達成する能力がなく、火だけがその能力がある。「その」二つは、同一の対象にまとめられるので、対象にとっての欺かないことと、と規定されるのである。知にとっての欺かないこととは、行動対象それ自身を判断することを通じて、それを獲得する能力のことである。(『量正理蔵の解説 七部語海』*Tshad marnigs pa'i gter gyi mam par bshad pa sde bdun ngag gi rol*

msho, シャーキャチヨクデン全集 第十九卷 六〇四頁四
一七行)

この注釈によれば、対象と知両者に欺かないことがある、と結論付ける他ないであろう。故に、著者の訳は、その根拠とするシャーキヤチヨクデンの注釈とも矛盾する。著者は、一体、どういう意図で、不適切な例を示し、自説と矛盾する注釈を引用したのだろうか。理解に苦しむ。ところで、シャーキャチヨクデンの注釈を引用するについては、別な問題もある。というのも、知と対象両者にとつて欺かないことがある、という注釈は、すでに、デーヴェンドラブッテイ *Devendrabuddhi* (六三〇—六九〇) が行っているからである。著者は、これについて何も言及していないが、この事実を知らなかったとは、到底思われぬ。なぜなら、本書の文献表に示されたビジュレール *Vittorio A. van Bijlert* 氏の著作には、デーヴェンドラブッテイ注への説明があるからである。著者は、ビジュレール氏の業績を故意に無視したか、あるいは、文献表に載せるだけで、実際は、読んでいないか、どちらであろう。いずれにしても、先行業績を蔑ろにするようなことは許されまい。

さて、著者は、次に、注釈者達によって、プラマーナの第二の定義を説く頌とされる『量評釈』「量成就」章第五頌「あるいは、『プラマーナは』未知の対象を明らかにするものである」を取り上げる。著者は、これを次のように説明する。

この記述によれば、真理と新しさという、それら二つの見地は、知が妥当であるための必要かつ十分条件である。この第二の記述において、ダルマキールティは、第一頌の実用的次元に還元されない真理の規範的概念を提示している。彼は、妥当な知を、

対象との適切な因果関係に基づく正しい結果をもたらすものとして描き出すのではなく、指向的なもの、つまり、対象を指すものとして描き出している。妥当であるためには、知は、実在する対象を明らかにしなければならないのである。(二九〇頁)

「実用的」、「指向的」、「規範的」という言葉は、著者が好んで用いるものであるが、第五頌を「指向的」とするのは適切であろうか。プラマーナが知である以上、それが対象を指向するのは当然であろう。しかし、第五頌は、単なる対象ではなく、未知の対象を問題視している。そのことは、従来の研究からも明らかであるし、著者自身「新しさ」という表現を第五頌に対して与えているのである。筆者の見るところ、著者の意図は、「指向的」という言葉の使用自体にあるようである。著者は、「この心の対象を指す性質は、ある西洋の哲学者によって、指向性と呼ばれている」(二八六頁)と述べている。著者は、西洋哲学の用語を通じてのダルマキールティ解釈を意図しているようである。筆者は、そのような意図を否定しない。しかし、不適切なものである。

さらに、著者は、ダルマキールティの別著『量決択』 *Pramāṇa-viniścaya* 「現量」 *Pratyakṣa* 章の、有名な冒頭の記述にも言及している。その記述とは、次のようなものである。

正しい知、それは二種である。すなわち、知覚と推理と言われるのである。この二つによって、対象を確定して、行動する場合、目的の達成について欺くことがないからである。

これに対する著者の説明を示そう。
この記述は、妥当なる知に二つの特質を与えている。第一は実

用的なものである。知は目的を達成することに役立つ限り妥当である。第二は、より明確に指向的、あるいは規範的要素を導入している。知は、我々が求める対象が正しく確定される限り、妥当である。(二九一頁)

著者は、ここで、「未知の対象」あるいは「新しさ」を捨て、「実用的・指向的」・「規範的」という好みの言葉によって、プラマーナを規定してみせるが、この数行前で、『量決択』に対して、次のような説明を与えている。

この統一的な記述によれば、知は、妥当であるために次の三つの基準を満たさねばならない。(a)実用的なあり方において理解される欺がないこと。(b)指向性に基づく真理の規範的概念。(c)新しさ、それを我々は暫時除外し得る。(二九一頁)

ここでは、「新しさ」を捨ててはいないが、除外しようとはしていない。著者は、ここで、またしても、自説の根拠としてシャーキャチヨクデンの注釈を取り上げる。その注釈は、次のようなものである。この典籍の意味は、新たに確定すること (gsar du bcad) と欺かないことが集合した知、それがプラマーナの定義なのである。

「ということである」。(『量正理蔵の密意莊嚴 正理の輪』
Tshad ma rigs gter gvi dngon rgyan rigs pa'i khor lo シ
ヤーキャチヨクデン全集 第十卷 二九四頁七行—二九五頁一
行)

この注釈に従うならば、「新しさ、それを我々は暫時除外し得る」などと、どうして言えるのだろうか。いっそシャーキャチヨクデンの注釈など持ち出さず、『量決択』の記述だけを提示した方が、著者にとって都合がよかつたのではないだろうか。なぜなら、『量決択』の

記述には、「新しさ」に類する言葉は全く見られないからである。しかるに、著者は、『量決択』とシャーキャチヨクデンの結び付きに、あくまでも、こだわる。結論を下す個所でも、こう述べている。

私は、シャーキャチヨクデンが説明したように、これ「『量決択』の記述」を、妥当なる知に関するダルマキールティの最終判断とみなす。(三二二頁)

著者が、自説にとって都合なシャーキャチヨクデンに、ここまで執着する理由は何だろうか。著者は、次のように、真情を吐露している。

私の選択は、シャーキャチヨクデンと似て、力強く問題に取り組む、ケードゥプ mkhas grub (一三八五—一四七四) のような自立した思想家に対する個人的敬愛を反映しているのである。(序言二三〇頁)

では、著者の敬愛するシャーキャチヨクデンの最終結論は、先の注釈そのままなのだろうか。シャーキャチヨクデンは、自説を示す個所では、こう述べている。

欺かない知、未知の対象を明らかにすることの二つは、自相を獲得することについて、意味は等しい。(『正理の輪』三〇七頁 六行)

ここでは、『量評釈』の第一頌と第五頌を統合しようとしている。シャーキャチヨクデンにとつては、『量評釈』こそが重要なのである。著者は、これをどう評価するのだろうか。

筆者は、先にも述べたように、本書を通読していない。それ故、著者の見解を誤解する可能性は十分にある。しかし、筆者の見た限りでは、本書は、あまりにも非論理的である。仏教論理学・認識論

という理屈の学問を論ずる書とは思えなからのである。以上によって不完全ながら、書評を終えよう。

注

(1) *Proceedings of the Second International Dharmakīrti Conference* ed. by E. Steinkellner, Wien 1991 一九二八頁

(2) *A Recent Rediscovery: Rgyal-tshab's Rigs gter nam bshad*, Kyoto 1994

(3) Leonard W. J. van der Kuip: *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Wiesbaden 1983 一三二—一四頁。

(4) 原文は reflexivity であるが、筆者には理解できなかったので、本文の内容から、このように訳した。

(5) Vittorio A. van Bijlert: *Epistemology and Spiritual Authority*, Wien 1989 一二二頁—一二三頁

(6) 注(5)のヴィジュレール本 一五〇頁 参照。

(7) 注(5)のヴィジュレール本 参照。

(8) T. Vetter: *Dharmakīrti's Pramāṇaviviscaya*, Wien 1966 三〇—三二頁 参照。

(9) 原文は 'thun であるが、mthun と改めて読む。シヤーキヤチヨクデンの注は、『量正理藏』の本文をそのまま引用したものであり、そのまじは 'mthun となっている。Tshad ma rigs gter 民族出版社 北京 一九八八 一三頁—三三頁—三三頁一行 参照。

[Georges B. J. Dreyfus: *Recognizing Reality Dharmakīrti's Philosophy and Its Tibetan Interpretations* (SUNY Series in Buddhist Studies) State University of New York Press, Albany 1997 xxi pp. 620 US\$ 25.25]

(一九九七年七月五日)